



第 18 号

平成 29 年 3 月 6 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

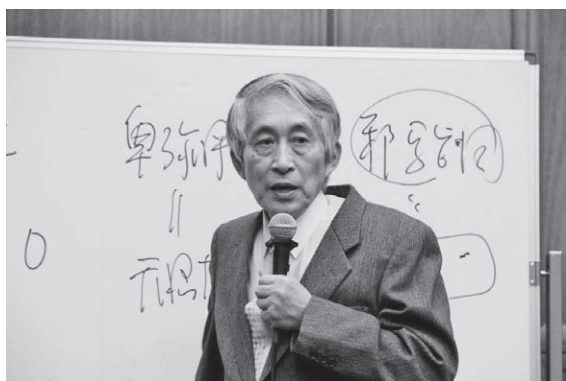
10 月以降入会 1,500 円

新春講演会

講師：安本 美典 氏

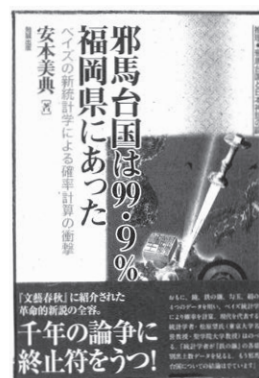
「邪馬台国は福岡県にあった—あり得ない畿内」

1 月 8 日、安本美典氏により「邪馬台国は福岡県にあった—あり得ない畿内」と題する講演会が岡山国際交流センターで行われた。200 名以上が参加。安本美典氏は 1934 年（昭和 9 年）、中国東北（旧満州）生まれ。戦後、岡山県吉備郡昭和



▶ 安本美典氏

町で育ち、岡山県立高梁高校、京都大学文学部を卒業された文学博士である。産業能率大学教授を経て古代史の研究に専念された。「邪馬台国の会」を主宰され、邪馬台国に関する書籍を多く出版されている。主なものに「卑弥呼の謎」「邪馬台国への道」「邪馬台国は 99.9% 福岡県にあった」がある。講演後、当会顧問の佐藤光範氏、吉備歴文会の近重博義氏、楯築サロンの岡将男氏を交えて「邪馬台国九州説と吉備」というタイトルで座談会が行われた。講演内容の要旨は次ページ以下の通りである。



● 歴・研・展・望

今年 1 月末、備中高梁駅前に山田方谷の像が完成、除幕された。いつも見慣れた方谷の顔ではない。若い方谷である。視線は天空の城・松山城がある臥牛山に向いているが、目指しているのは山の麓に方谷が開いていた家塾・牛麓舎である。

方谷が塾を開いたのは天保飢饉、大塩平八郎の乱後の天保 9 年。33 歳の時である。「今こそ、勉学に勤しむ時だぞ」。塾生たちの顔を思い出し、牛麓舎へ急いでいるかのようだ。像はありがちな足を揃えた像ではなく、まさに今、一步を踏み出した像だ。方谷の数々の偉業の中、この像は教育者・方谷にスポットを当てているように思える。

「歴史」は、奥が深く、幅も広い。キーワードの当て方で、様々に違ったものが見えてくる。最

近の流行は「観光」だが、「教育」や「地域活性化」もあるだろうし、「先人の名言」「人生訓」と言ったものもあるだろう。

凜としたたたずまいの方谷の右手の拳は、ぎゅっと握りしめられている。後に遭遇することになる藩政改革や、幕末の動乱まで予知していたとは思えないにしても、塾生の教育に全身全霊を傾けようとしていた若き教育者・方谷が、今再び、高梁の地に蘇った。現代の若者に、なんと呼びかけているのだろうか。

岡山歴史研究会の新年度総会（4 月 22 日）の記念講演の講師に山田方谷の玄孫、山田敦氏をお迎えする。新たな方谷像が聞けるのではないかと、楽しみである。

(会長代行 大田弘之)

「邪馬台国は福岡県にあった一あり得ない畿内」

邪馬台国論争

西暦 284 年頃、中国は魏、呉、蜀の三国に分かれていた。その中で「三国志」が西晋の陳寿により著された。その中に『魏志倭人伝』が書かれており、その中で、倭人は（朝鮮の）帯方（郡）の東南の大海の中にある。山（の多い）島によって国邑（国や村）をなしている。もとは百余国であった。漢の時（中国に）朝見するものがあつた。いま、使者と通訳の通うところは三十か国であると書かれている。

（帯方）郡から倭にいたるには、海岸に沿って水行し、韓国（南鮮の三韓）をへて、あるときは南（行）し、あるときは東（行）し、倭からみて北岸の狗邪韓国（弁韓・辰韓など十二か国の一つで、加羅すなわち金海付近）にいたると書かれている。

東洋史学者・白鳥庫吉（1865～1942）は明治期の東京帝国大学（現、東京大学）を代表する史家であった。東洋史学の開拓者であり、数々の新研究を発表するとともに、多くの研究者を育成した。

白鳥はまた、邪馬台国北九州説を説き、畿内大和説を主張する京都帝国大学の内藤湖南と白熱の論争を戦わせた。邪馬台国の位置をめぐる諸説はそれまでも出されていたが、現代まで長く尾を引く、いわゆる「邪馬台国論争」は、この時はじめて激しい沸騰をみせたといつてよい。これがいまだに尾を引いている。



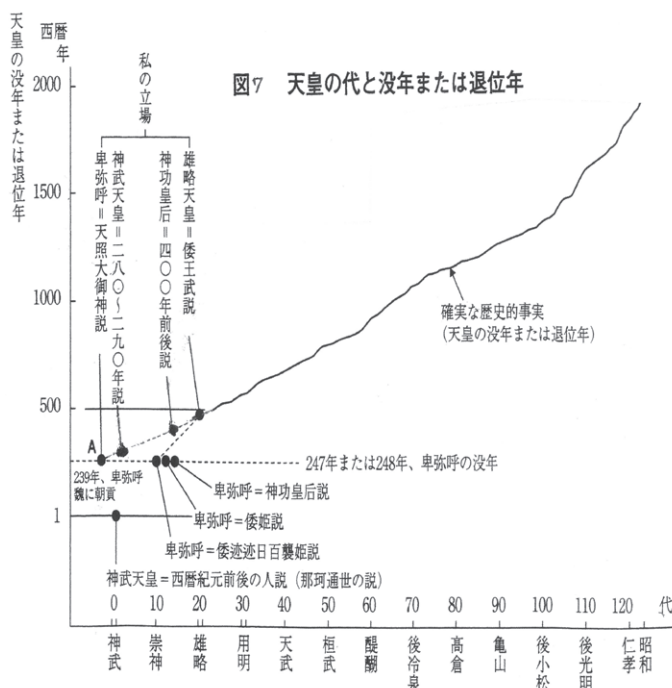
和辻哲郎 (1889～1960) (写真2)

白鳥庫吉 (1865～1942) (写真1)

白鳥は明治 43 年に発表した論文「倭女王卑弥呼考」のなかで、『魏志倭人伝』の「卑弥呼」に関する記事内容と『古事記』『日本書紀』の「天照大御神」に関する記事内容を比較している。そして二つの記事内容について「その状態の酷似していることを何人も否認できない」と述べている。『古事記』『日本書紀』の神話が伝える天照大御神は『魏志倭人伝』の記す卑弥呼の反映なのではないか。「高天の原」は邪馬台国の反映なのではないかとする考えを示している。

邪馬台国東遷説

白鳥の見解を受け継ぎ、大きく発展させたのが東京大学の哲学者・和辻哲郎である。和辻哲郎の「卑弥呼＝天照大御神説」は『日本古代文化』（岩波書店、1920 年刊）の中に見える。和辻がまだ 26 才の時の著作である。この著の中ではじめて「邪馬台国東遷説」を打ち出した。「邪馬台国東遷説」は、邪馬台国は九州に存在し、のちにその勢力を受け継ぐものが東遷して「大和朝廷」になったとする説である。「君主の性質については記紀の伝説は完全に魏人の記述と一致する。天照大御神は高天の原において、みずから神に祈った。天上の君主が神に祈る地位にあって、万神を統治する有様はあたかも地上の倭女王が、神につかえる地位にあって人民を統治するありさまのごとくである、と。和辻は次いで大和朝廷の国家統一がどのようにおこなわれたかを述べている。大和朝廷は邪馬台国の後継者であり、『古事記』『日本書紀』の伝える「神武東征」の物語の、「国家を統一する勢力が九州から来た」という中核は否定しがたい伝説に基づ



くものであろうとする。その後、和辻の「卑弥呼＝天照大御神説」「邪馬台国東遷説」は多くの人によって受け継がれ発展させられた。

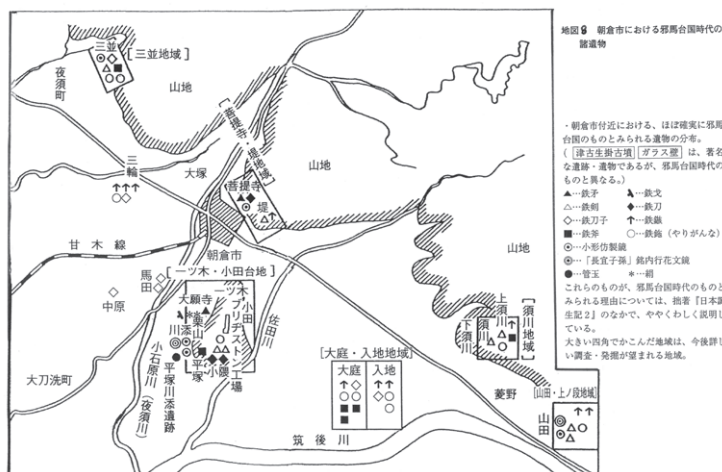
たとえば学習院大学の教授であった飯島忠夫氏はその著書『日本上古史論』の中で

- (1) 天照大御神の時代は、卑弥呼の時代にあたる。
- (2) 九州の邪馬台国が本州の大和に移動した。
- (3) その移動時期は西暦 300 年前後である。
- (4) その移動の記憶が神武天皇東征伝承であると考えられる。

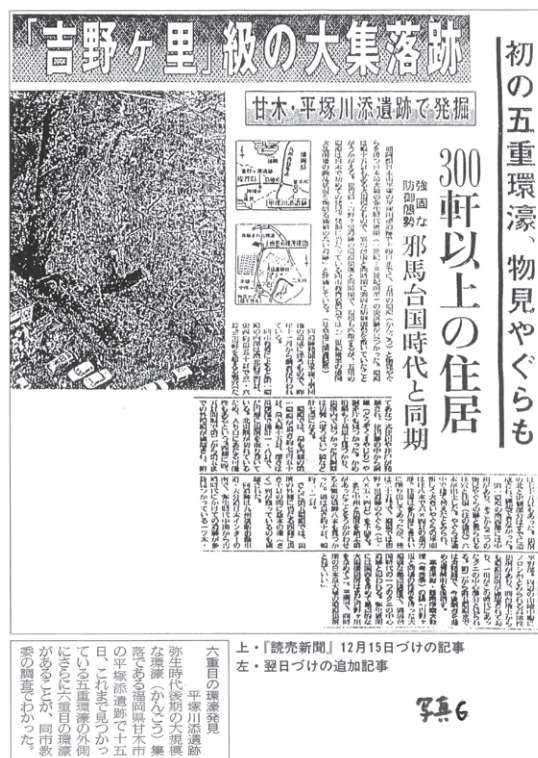
と述べている。安本氏自身もこのような説に基本的に賛成すると述べられた。

甘木・平塚川添遺跡

福岡県甘木市（現在は朝倉市）平塚の平塚川添遺跡で、1992年（平成4年）吉野ヶ里遺跡に匹敵する遺跡が発掘された。弥生時代後期の大環濠集落址である。六重の環濠を持つ集落である。規模は吉野ヶ里遺跡に匹敵するもので、時代は弥生時代後期（一世紀―三世紀前半）である。五重の環濠（一部は六重）は日本では初めてで、二世紀後半の倭国大乱前後の動乱状況を物語る価値の高い遺跡と評価されている。環濠に中洲があり、そこから2つの物見やぐらの跡と見られる柱穴と柱根六本が出土した。



・ 第37代崇神天皇の「朝倉の橘の広庭の宮」については、朝倉市の山田とする説と、備前とする説とがある。



この遺跡は九州横断自動車道・大分道甘木インターの南で、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡が多数見つかっている 1 ツ木・小田台地の西端に位置する平野部にある。周辺の山陵中腹にノロシ台とみられる高地性集落があり、同台地上からも環濠集落が確認されており、一帯がこの時代にあったクニの中心部分と見られる。

箱式石棺

箱式石棺は弥生時代から古墳時代にかけて、日本列島のほぼ全域で発掘されている。『箱式石棺』の著者、

茂木雅博氏によると、九州で多く見られ、なかでも福岡県の市と町にとくに多い。邪馬台国時代の北九州の主な墓制は箱式石棺であった。北九州では2世紀末頃から、墓制が甕棺から箱式石棺へ移行している。箱式石棺は、福岡県朝倉市のあたりを中心として分布している。この地に卑弥呼の宮殿があったのではないかと考えられる。



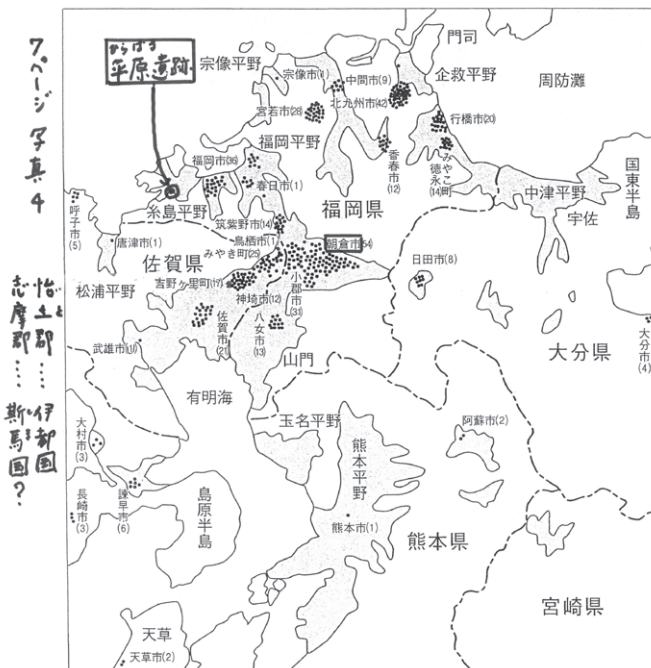
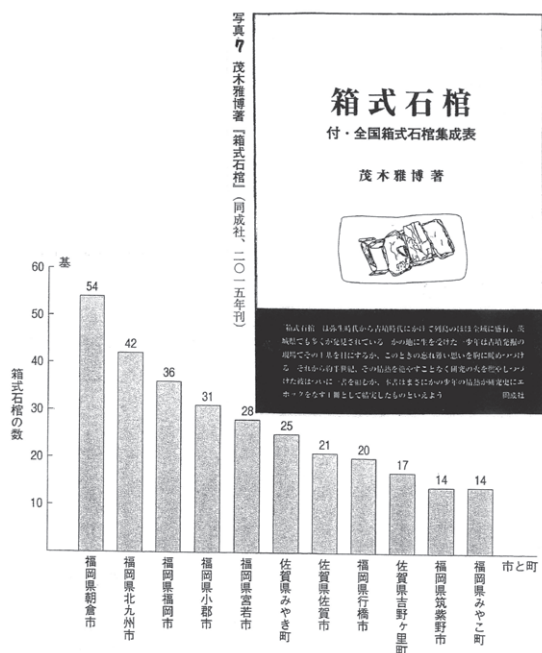
表5 箱式石槽

邪馬台国時代の、北九州の、おもな墓制は、箱式石棺であった。北九州では、2世紀末ごろから、墓制が、甕棺から、箱式石棺に移行している。

箱式石棺は、福岡県の朝倉市のあたりを中心として分布する。この地に卑弥呼の宮殿があったのではないかな。

写真は、福岡県福岡市市役所佐原遺跡（ひさばる遺跡ともいう）出土の箱式石棺。

（写真は、原田大六著『実在した神話』（学生社、1966年刊）による。）



地図7 箱式石棺の分布(弥生時代前期・中期の箱式石棺を除く。)

「平原弥生古墳」と原田大六

福岡県前原町平原にある平原遺跡から多くの鏡が出土した。最大のものは鏡の面径が46cmもあるものがこの遺跡から出土した。大きさでは国内で最大のものである。また、出土した鏡の数は福岡県が飛び抜けて多い。

この遺跡の調査をしたのが原田大六である。彼は、大正6年生まれ、第2次世界大戦で召集され、昭和21年中国から郷里の福岡県前原町平原に帰還した。中山平次郎氏に師事し、平原古墳の発掘調査に参加。その研究成果をもとに「邪馬台国論争」「銅鐸への挑戦」など多数の著作を残した。昭和60年、彼が逝去した後、妻のイトノさんが報告書「平原弥生古墳」を自費出版し、平原遺跡出土品の国宝指定にも奔走した。

写真1 原田大六氏(1917~1985)



原田大六夫妻 (写真1)

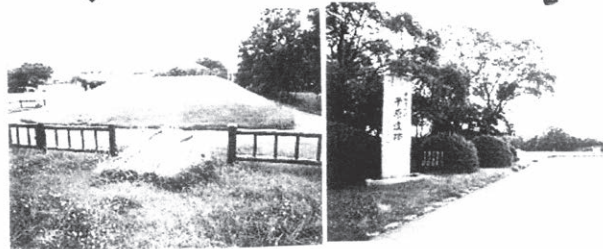
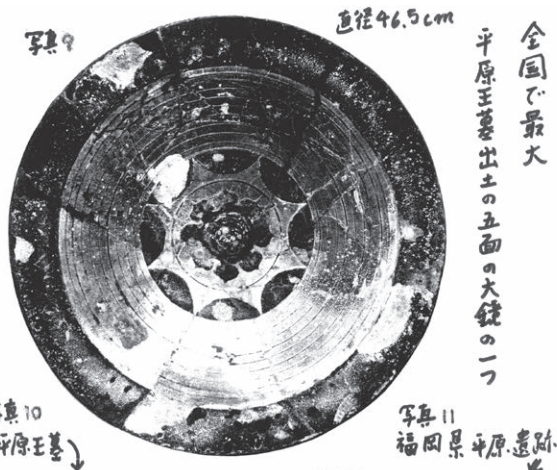


表3 全国出土の鏡の大きさ(面径) ランキングベスト10
平原王墓出土鏡の面径の大きさは、全国出土の五千面近くの鏡を圧倒する

10	大阪府紫金山古墳	勾玉文鏡	三十五・七センチ
9	奈良県下池山古墳	倣製内行花文鏡	三十七・六センチ
8	(出土地不明)	竜竜鏡	三十八・八センチ
7	奈良県柳本大塚古墳	内行花文鏡	三十九・七センチ
6	山口県茶臼山古墳	竜竜鏡	四十四・五センチ
5	福岡県平原王墓	内行花文八葉鏡	推定四十六センチ以上
4	福岡県平原王墓	内行花文八葉鏡	四十六・二センチ
3	福岡県平原王墓	内行花文八葉鏡	四十六・四センチ
2	福岡県平原王墓	内行花文八葉鏡	四十六・五センチ
1	福岡県平原王墓	内行花文八葉鏡	四十六・五センチ

表4 全国における鏡の多数副葬のランキングベスト10

10	長野県川柳將軍塚古墳	二十七面
9	岡山県丸山古墳	三十一面
8	福岡県須玖岡本遺跡	三十二面
7	奈良県新山古墳	三十四面
6	奈良県黒塚古墳	三十四面
5	福岡県三雲遺跡(王墓)	三十五面
4	奈良県佐味田宝塚古墳	三十六面
3	京都府椿井大塚山古墳	三十六面以上
2	福岡県平原王墓	四十面
1	奈良県桜井茶臼山古墳	八十一面

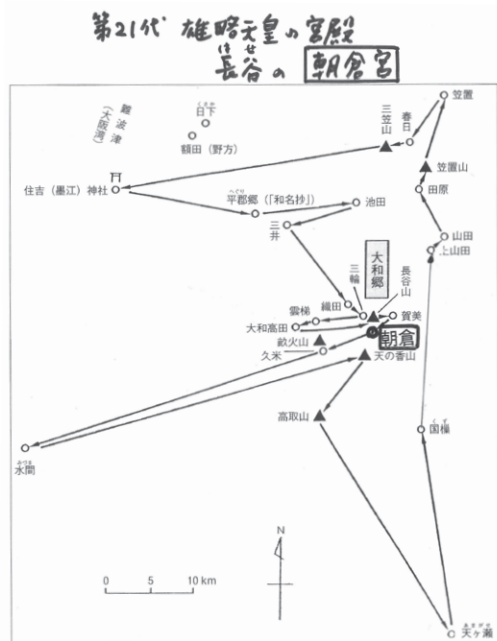
はらだ-だいりく【原田大六】(1917-85) 昭和時代後期の考古学者。大正6年1月1日生まれ。第2次大戦で召集され、昭和21年中国から郷里の福岡県前原市平原に帰還。中山平次郎に師事し、平原古墳の発掘調査に参加。その研究成果をもとに「邪馬台国論争」「銅鐸への挑戦」など多数の著作をのこした。昭和60年5月27日死去。68歳。糸島中学卒。

邪馬台国は福岡県にあった

地名学者の鏡味完二氏はその著『日本の地名』(角川書店、1964年刊)の中で、「九州と近畿のあいだで地名の名づけかたが実によく一致している。これは単に民族の親近ということ以上に、九州から近畿への大きな集団の移住があったことを思わせる。」と述べている。「大きな集団の移住」、これは「邪馬台国東遷説」と重なりあうような考えである。

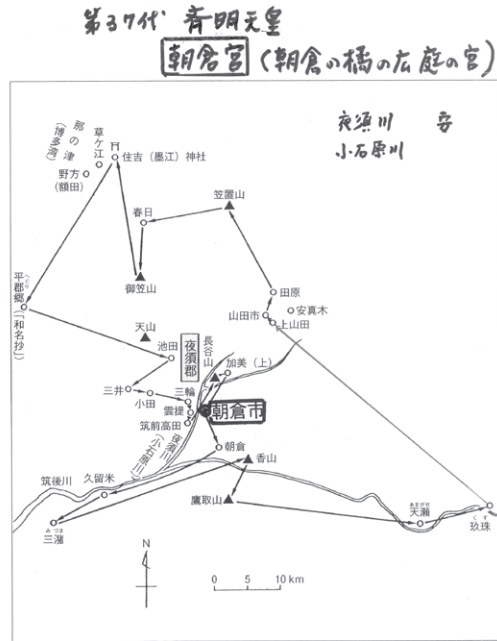
古くは、大和の天の香山は天にある香山が下ってきたものと考えられてきた。が、鎌倉時代中期にできた『日本書紀』の注釈書、『続日本記』には『伊予風土記』を引用して「天の香具山は天から天下る時に二つにわかれて、ひとつは大和に、ひとつは伊予に天下った。大和にくだったのが大和の天の香具山であり、伊予に下ったのが天山であるとしている。

畿内にある第21代、雄略天皇の宮殿、長谷の「朝倉宮」と九州、福岡県にある第37代、斉明天皇の「朝倉宮」(朝倉の橋の広庭の宮)のまわりの地名は下図の通りである。不思議な一致が見られる。



(1) 朝倉のまわりの地名 (畿内・地名)

地図2 北九州の地名と大和の地名とのふしぎな一致



(2) 朝倉市のまわりの地名 (北九州の地名)

ベニバナ論争

邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡で、弥生時代後期～古墳時代初め（3 世紀中頃）の溝跡から採取した土にベニバナの花粉が大量に含まれていることがわかった。これまで最古だった藤ノ木古墳（奈良県斑鳩町、6 世紀後半）の例を 300 年以上さかのぼる発見である。

ベニバナはシルクロードを通じ、中国から伝わったとされる。市教委は「当時、加工技術を携えて来た渡来人が、この地域で染め物や化粧品などの生産をしていた」と見ている。分析された土は、東西 2 キロ、南北 1.5 キロの同遺跡の中心部にある溝から 1991 年に採取されたもの。奈良教育大学、金原正明准教授が分析したところ、1 立方センチメートル当たり、270～560 個の花粉が確認された。通常では考えられないほどの量で、遺跡の周辺にあったベニバナ染織の工房から流された廃液が溝に残っていたと判断された。

「魏志倭人伝」には、倭国の女王・卑弥呼が魏に赤と青の織物を献上したとの記述がある（読売新聞 2007 年 10 月 3 日朝刊）。倭人伝には「（倭人は養蚕を行い、糸を紡ぎ、細かな縑や綿を作っている）」と記されている。また、魏に献じた品物のなかに「倭錦、絳青縑、綿衣、布」などがある。

ただ、考古学者の森浩一氏はその著「古代史の窓」のなかで、ヤマタイコク奈良説を唱える人が知らぬ顔をしている問題がある。それは絹の問題である。京都工芸繊維大学名誉教授、布目順郎氏の名著「絹の東伝」のなかに、『絹を出した遺跡の分布から邪馬台国の所在等を探る』の項目があり、弥生時代に限ると絹を出土しているのは福岡、佐賀、長崎の三県に集中し、前方後円墳時代、つまり四世紀とそれ以降になると奈良や京都にも出土し始める事実を東伝と表現された。布目氏の結論はいうまでもなく、倭人伝の絹の記事に対応できるのは、北部九州であり、ヤマタイ国もそのなかに求めるべきだということである。この事実は論破しにくいので、つい知らぬ顔になるだろうと述べている。

邪馬台国があった弥生時代後期までの絹は、すべて九州の遺跡からの出土である。近畿地方をはじめとした本州で絹が認められるのは古墳時代に入ってからのものである。ほぼ同時代に日本に入ったとみられる稲作文化があつという間に東北地方の最北端まで広がったのとは大きな違いである。

朝日新聞の柏原精一氏も『図説・邪馬台国物産帳』（河出書房新社、1993 年）のなかで布目順郎氏の研究などを紹介したうえで、『中国がそうしたように、養蚕は九州の門外不出の技術だった。少なくともカイコが導入されてから数百年は九州が日本の絹文化を独占していたのではないかと。倭人伝のいうとおりなら、邪馬台国はまさしく絹の国。出土品からみても、少なくとも当時の九州にはかなり高度化した養蚕文化が存在したことは疑いがない。『発掘調査の進んでいる本州、とくに近畿地方で今後、質的にも量的にも九州を上回るほどの弥生時代の絹が出土することは考えにくい。』そうした立場に立つなら、『絹からみた邪馬台国の所在地推定』の結論は自明ということになるだろうと述べている。

『読売新聞』の記者であったジャーナリストの矢沢高太郎氏は、「新聞やテレビで大きく報道されることで社会的な関心が高まり、遺跡の生命が守られたケースは多い。しかし、同時に、学者にとっては地味な論文を発表する以前にマスコミに大々的に取り上げられる方が知名度も上がり、学会内部での地位も保証される傾向が強まり、一部の学者や行政担当者はそれに気づき、狡知にたけたマスコミ誘導を行ってくるケースが多々見られてきた。その傾向は藤村氏以外には考古学の本場である奈良県を中心とする関西地方に極端に多い。発表という形をとられると新聞各社の内部においても何をおいても書かざるをえないような自縄自縛の状況が出来上がってしまった。その傾向は関西一帯では日常化している。藤村氏は『事実の捏造』だったが、わたしはそれらを『解釈の捏造』と呼びたい」と述べている。（以上、当日の講演会資料から）

邪馬台国時代にもベニバナ

奈良・纏向遺跡から大量の花粉

卑弥呼の織物と関係か

ベニバナはシルクロードを通じ、中国から伝わったとされる。市教委は「当時、加工技術を携えて来た渡来人が、この地域で染め物や化粧品などの生産をしていた」と見ている。分析された土は、東西 2 キロ、南北 1.5 キロの同遺跡の中心部にある溝から 1991 年に採取されたもの。奈良教育大学、金原正明准教授が分析したところ、1 立方センチメートル当たり、270～560 個の花粉が確認された。通常では考えられないほどの量で、遺跡の周辺にあったベニバナ染織の工房から流された廃液が溝に残っていたと判断された。

☆読売新聞 2007 年 10 月 3 日（水）朝刊の記事

ベニバナ論争

邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡で、弥生時代後期～古墳時代初め（3 世紀中頃）の溝跡から採取した土に、ベニバナの花粉が大量に含まれているのがわかった。市教委が白、発表した。これまで最古だった藤ノ木古墳（斑鳩町、6 世紀後半）の例を 300 年以上さかのぼる発見。

年産邪馬台国の魏に赤と青の織物を献上したとの記述がある。『魏志倭人伝』には「（倭人は養蚕を行い、糸を紡ぎ、細かな縑や綿を作っている）」と記されている。また、魏に献じた品物のなかに「倭錦、絳青縑、綿衣、布」などがある。

ただ、考古学者の森浩一氏はその著「古代史の窓」のなかで、ヤマタイコク奈良説を唱える人が知らぬ顔をしている問題がある。それは絹の問題である。京都工芸繊維大学名誉教授、布目順郎氏の名著「絹の東伝」のなかに、『絹を出した遺跡の分布から邪馬台国の所在等を探る』の項目があり、弥生時代に限ると絹を出土しているのは福岡、佐賀、長崎の三県に集中し、前方後円墳時代、つまり四世紀とそれ以降になると奈良や京都にも出土し始める事実を東伝と表現された。布目氏の結論はいうまでもなく、倭人伝の絹の記事に対応できるのは、北部九州であり、ヤマタイ国もそのなかに求めるべきだということである。この事実は論破しにくいので、つい知らぬ顔になるだろうと述べている。

邪馬台国があった弥生時代後期までの絹は、すべて九州の遺跡からの出土である。近畿地方をはじめとした本州で絹が認められるのは古墳時代に入ってからのものである。ほぼ同時代に日本に入ったとみられる稲作文化があつという間に東北地方の最北端まで広がったのとは大きな違いである。

朝日新聞の柏原精一氏も『図説・邪馬台国物産帳』（河出書房新社、1993 年）のなかで布目順郎氏の研究などを紹介したうえで、『中国がそうしたように、養蚕は九州の門外不出の技術だった。少なくともカイコが導入されてから数百年は九州が日本の絹文化を独占していたのではないかと。倭人伝のいうとおりなら、邪馬台国はまさしく絹の国。出土品からみても、少なくとも当時の九州にはかなり高度化した養蚕文化が存在したことは疑いがない。『発掘調査の進んでいる本州、とくに近畿地方で今後、質的にも量的にも九州を上回るほどの弥生時代の絹が出土することは考えにくい。』そうした立場に立つなら、『絹からみた邪馬台国の所在地推定』の結論は自明ということになるだろうと述べている。

邪馬台国があった弥生時代後期までの絹は、すべて九州の遺跡からの出土である。近畿地方をはじめとした本州で絹が認められるのは古墳時代に入ってからのものである。ほぼ同時代に日本に入ったとみられる稲作文化があつという間に東北地方の最北端まで広がったのとは大きな違いである。

朝日新聞の柏原精一氏も『図説・邪馬台国物産帳』（河出書房新社、1993 年）のなかで布目順郎氏の研究などを紹介したうえで、『中国がそうしたように、養蚕は九州の門外不出の技術だった。少なくともカイコが導入されてから数百年は九州が日本の絹文化を独占していたのではないかと。倭人伝のいうとおりなら、邪馬台国はまさしく絹の国。出土品からみても、少なくとも当時の九州にはかなり高度化した養蚕文化が存在したことは疑いがない。『発掘調査の進んでいる本州、とくに近畿地方で今後、質的にも量的にも九州を上回るほどの弥生時代の絹が出土することは考えにくい。』そうした立場に立つなら、『絹からみた邪馬台国の所在地推定』の結論は自明ということになるだろうと述べている。

『読売新聞』の記者であったジャーナリストの矢沢高太郎氏は、「新聞やテレビで大きく報道されることで社会的な関心が高まり、遺跡の生命が守られたケースは多い。しかし、同時に、学者にとっては地味な論文を発表する以前にマスコミに大々的に取り上げられる方が知名度も上がり、学会内部での地位も保証される傾向が強まり、一部の学者や行政担当者はそれに気づき、狡知にたけたマスコミ誘導を行ってくるケースが多々見られてきた。その傾向は藤村氏以外には考古学の本場である奈良県を中心とする関西地方に極端に多い。発表という形をとられると新聞各社の内部においても何をおいても書かざるをえないような自縄自縛の状況が出来上がってしまった。その傾向は関西一帯では日常化している。藤村氏は『事実の捏造』だったが、わたしはそれらを『解釈の捏造』と呼びたい」と述べている。（以上、当日の講演会資料から）



写真 4
「女王卑弥呼」：宋永大治良画 大阪府立弥生文化博物館蔵

歴研、秋の探訪会「矢掛町の大名行列、他」

昨年、11 月 13 日、歴研、秋の探訪会が行われた。参加者数は 43 名。矢掛町の大名行列の日程に併せ、岡山県南西部を中心にして開催された。

探訪は佐藤光範顧問の案内で、バスで岡山駅から総社市宝福寺・石畳神社、倉敷市真備町のまきび公園、矢掛町フルーツの里・大名行列見学、浅口市国立天文台を巡るコース。

宝福寺では紅葉真っ盛りの中、総社の山本茂会員も案内に加わり雪舟禅師の逸話やここにあるのが不思議な熊山霊山寺梵鐘の由来を聞く。続いて宝福寺からほど近い高梁川西岸にある式内社石畳神社で高梁川淵にそびえる高さ約 60 m 大石塊霊代へ急坂を登ってお参り、絶景に驚嘆する。

まきび公園では現地ガイドの案内で、1300 年前に遣唐使として任命されたわが岡山が誇る歴史上の大偉人、吉備真備の大活躍や現代まで続く業績を解説して頂き、感動する。

フルーツの里では矢掛農協製の弁当を大空の下で開き、お腹を満たし、探訪会のメイン行事、矢掛大名行列見学に向かう。120 人の華麗な大名行列が「下にい」「下にい」の掛声と共に矢掛本陣前街道を西から東へゆっくりと進んで行く。殿、姫、奴等々多彩な顔触れ。この衣装装束は太秦から 200 万円でレンタルしていると笠岡の森山上志会員から伺う。まさに矢掛町を代表する大イベントだ。



探訪会の最後は、晴れの国岡山に相応しい標高約 350 m の竹林寺山にある国立天文台に上がり、天文台職員から国内最大級の口径 188cm の天体望遠鏡や、さらに京都大学が約 2 年後を目指して建設中の東アジア最大の口径 388cm 天体望遠鏡の説明を受ける。この新しい天体望遠鏡が完成された暁には岡山から全世界に向けて宇宙のメッセージが発信されるという、壮大な構想を聞き胸がわくわくする。

一日で古代から近世、現代そして未来への岡山の歴史を学んだ 28 年秋の探訪会でした。

(事業委員 工藤博)



訂正

前号、17 号において誤りがありました。お詫びして訂正します。

	誤	正
1 ページ、10 月以降入会	1,000 円	1,500 円
1 ページ 書き出し部	去る 6 月 25 日、定例の	去る 8 月 19 日、定例の
1 ページ 右、上から 3 行目	8 月 18 日、臨時の	9 月 6 日、臨時の
12 ページ 編集後記、書き出し	6 月の定例	8 月の定例

歴研サロン

杉嘉夫氏講演「池田綱政と後樂園」を聴いて

昨年 12 月 9 日、杉嘉夫氏による「池田綱政と後樂園」と題する講演が行われた。33 名が参加。杉氏は岡山市内に生まれ育ち、長じて国の防衛に関する業務に携わってこられた。定年後、長い間、後樂園の観光ガイドをやってこられ、数多くの資料の中から 30 数枚を選んで、パワーポイントで説明された。

後樂園は池田綱政によって造営されたもので、13 年をかけ、元禄 13 年（1,700 年）に完成した。

名君の誉れ高い池田光政に比べ、息子、綱政は当時、放蕩ものと揶揄されていたとのこと。造営の目的は 3 つあるという。一つは干拓事業の成功で石高が増加し、それによる蓄財に対する幕府の目を避けるために散財させる評判をとること、そして対砲兵戦に対する防衛施設をつくることであつたという。更には鍛錬場説があるという。

光政、綱政とも親子 2 代にわたり、娘を一条右大臣家の正妻として嫁がせ、参勤交代の行き帰りに京都に寄っていることから公家文化へのあこがれが強かった。それにより、曲水を真似て、賀茂川の石を言い値で買って配置する日本庭園を造らせたという。

日本庭園の究極の美は「さび（鏽）」ではないかといわれた。庭園を見て形を味わうのではなく、それ以上に時間を味わっているのではないか、それが流店の置石に象徴されるという。

光政は日記に「総て国の大事二つ是あり候、一は軍陣、一は祭にて候故、これほど大なる事は無之候」と書いている。政治学者、丸山真男の「兵営国家論」を引合いにだし、江戸時代は爪の先まで武装し、一朝事ある時は直ちに戦時総動員体制に切り替えられるような統治組織を整えていたた



め、二世紀半にわたる天下泰平が保たれたとする説を紹介された。

池田光政は幕閣との対立をも辞せずとの策を採り、備前東部領域に籠城の準備をすすめたが、綱政は幕政に順応する政策を採り、岡山城の防衛力強化の一環として後樂園を築営し、「御舟入」の整備を行ったと説明された。そのことは「殿様、杉土手大筒御覧」の中の御後園諸事留帳の中に 14 年間に 10 回も大筒を見学したと書かれている。その頃の大砲の到達距離は 400 ～ 500 m だったであろうという。その幅が後樂園のそれと一致する。

最後に、景観を見る目を持つと呼びかけられた。「風景」の概念は最も近くにいる農夫にはなく、「風景」は文学や絵画等の芸術的な眼鏡を通じて作られたイメージである。「景観」には人間が普遍的に好む形はないが、「景観」を見る目をもった芸術家などによって新しい美が次々に発見され、生成されるものだと思われにくくられた。

(楠 敏明 会員)

平成 29 年度定期総会のご案内

日 時：4 月 22 日（土）受付 12 時 30 分～

場 所：岡山国際交流センター（岡山市北区奉還町、086-256-2000）

総 会：13 時～

記念講演：14 時～

平成 28 年度の事業、決算報告。

新年度の事業計画、予算審議。

役員改選。

「山田方谷の人間像」

講師 山田 敦氏（山田方谷玄孫）

詩吟 白神 信子氏

山田方谷の漢詩

第 1 回 岡山県歴史研究会サミット開催

2 月 18 日、第 1 回岡山県歴史研究会サミットが放送大学岡山学習センター、岡山歴史研究会の共催で、岡山大学で行われた。約 200 名が参加。計画、段取りを担当した大原安生氏の司会で、放送大学岡山学習センター 岡田雅夫所長、岡山歴史研究会の大田弘之会長代行の開会の挨拶に続いて開催された。

記念講演は中国学園大学 中国短期大学の学長、松畑熙一先生の『歴史“楽”習』『教育福祉県岡山の創生』と題する講演が行われた。

そして、午後からは 5 つの教室に分かれ、次ページの表の講師により、それぞれのテーマについての講演が行われた。



放送大学岡山学習センター
岡田 雅夫 所長



岡山歴史研究会
会長代行 大田 弘之 氏

記念講演「歴史“楽”習—教育福祉県岡山」の創生

講師 松畑 熙一（中国学園大学・中国短期大学学長）

元、岡山大学副学長、松畑熙一先生の記念講演は古里に関する唱歌から始まった。「夕焼け小焼け」「赤とんぼ」「祭りの歌」「ふるさと」等、先生の美声がホール内に響き渡った。そして、平成 18 年、教育基本法が改正され、「郷土と歴史を大事にする」という文言が加えられたと説明された。

「日本人の古来からの文化的特徴はどのようなものだろうか？」という命題を提起して説明された。都市文明と田舎文化を比較してその特徴を羅列され、日本文化の特徴は形に表すとすれば「楕円」社会ではないか、1 つの中心をもつ円ではなく、中心を 2 つ持つ楕円ではないかと力説された。そして、これからの成熟社会の基本は

「成熟社会」＝「成長社会（競争社会）＋「共生社会」＝「楕円社会」ではないかと主張された。

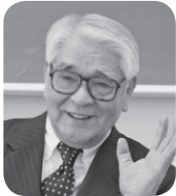
次に、本居宣長の「敷島の大和心をひと問わば 朝日にほふ山ざくら花」を鑑賞しようと提唱された。この歌には、いただきます、有難うなど、命への感謝の気持ちが表されている。日本語は英語と違って感性を表す性質が強い言葉であると。

そして、専門の、語学、日本語と、英語の比較から歴史を考える例として、「自然」と「nature」を取り上げられた。日本語の自然には人も自然の中に含まれる。その上にお天道様がいる形であるが、英語の自然、nature には人間は含まれてない。日本語は世界の中でもきわめて美しい言語であると強調された。

教育の目的は歴史的教養を身に着けることにある。そのためには主体的、対話的な学び方が必要である。そして、素読ないしは音読が必要であると力説。先生ご自身、毎日、新聞のコラム欄を音読しているとのことである。



岡山県歴史研究会サミット

ホール	記念講演 『歴史“楽”習』「教育福祉県 岡山」創生 松畑 熙一 先生 中国学園大学・中国短期大学 学長 	
教室	13 時～ 14 時半	15 時～ 16 時半
12 番教室	「熊山遺跡・熊山霊山寺と 唐招提寺第 4 代住職 安如法」 丸谷 憲二 氏 (先史古代研究会 会長) 	「熊山遺跡研究会が解く ＜石積み＞の謎」 佐藤 光範 氏 (熊山遺跡群調査・ 研究会 理事) 
13 番教室	「磯崎眠亀会館の役目と顕彰」 佐藤 允啓 氏 (磯崎眠亀記念館 館長) 	「100 年が過ぎた三幡軽便鉄道」 内田 武宏 氏 (三幡鉄道研究会 会長) 
14 番教室	「蒜山高天原」を読む 宮永 優 氏 (蒜山高天原神話 ロマンの会 代表) 	「古代吉備の国先進地域？ 謎の王陵 秦の郷歴史遺産」 板野 忠司 氏 (秦歴史遺産保存協議会 会長) 
15 番教室	「緒方洪庵、岡山における門弟たち」 大濱 文男 氏 (岡山人物銘々伝を語る会) 	「キリシタン武将 明石掃部」 藤原 純 氏 (放送大学岡山学習センター 歴史クラブ 副代表) 
17 番教室	「早島！安原備中の守 誰？」 家康、驚嘆！絶賛！銀山王 川上 孝 氏 (早島町制 120 周年 記念事業 委員) 	「吉備国の宝を守る」 —司馬遼太郎の「吉備国」論— 村上 進通 氏 (岡山県農山村地域 研究所 代表理事) 

犬養毅を顕彰する 岡山県犬養木堂記念館

犬養木堂記念館 石川 由希

岡山市の中心部から西、岡山市と倉敷市を結ぶ新幹線側道沿いにある駐車場から昔ながらの集落の中を 5 分ほど歩くと、大きな楠と漆喰土塀の表門が出迎えます。ここ犬養木堂記念館は、五・一五事件で海軍青年将校らの凶弾に倒れた第 29 代内閣総理大臣 犬養毅（号 木堂）の功績をたたえとともに、地域文化の振興に寄与することをめざして岡山県が整備し、無料公開をしている施設です。

表門を入ると 1978 年（昭和 53 年）に国指定の重要文化財に指定された旧犬養家住宅（木堂生家）があり、吉備地方の豪農の屋敷構えが残る家屋に上がって見学することができます。木堂生家を通り抜けると 1993 年（平成 5 年）に新たに建設された蔵風の鉄筋コンクリート造りの木堂記念館に着き、木堂ゆかりの資料を見学することができます。

当館で顕彰している木堂は、近代日本の議会政治、特に政党政治の確立に力をそそいだ政治家で、書家としても著名な人物です。代々庭瀬藩の庄屋、郡奉行などを務めた旧家の次男として生まれた木堂は、13 歳で父を亡くし、20 歳で母方の親戚の援助により上京、幼少期から漢学を学び文章を書く素養があったことから、新聞記者として働きながら、慶應義塾で学びます。休学して西南戦争の戦地から発信した記事「戦地直報」は、ジャーナリストとしての木堂の名を広めました。当時の慶應義塾は、福澤諭吉のもと、演説に力を入れており、木堂もその環境の中、議論することの大切さを学んでいきました。

政治家一衆議院議員となつてからの木堂は、反藩閥・反軍閥をかかげ、政党政治を主張するとともに時の内閣への不信任演説などを行い、政府に対抗する旗手として活躍。1913 年（大正 2 年）頃の憲政擁護



運動では、尾崎行雄とともに「憲政の神様」と称されます。広く国民の政治参加を推奨していた木堂は 1920 年（大正 9 年）頃から納税要件を撤廃し、成人皆参加の普通選挙の実現に尽力し、男子のみではありますが、1925 年（大正 14 年）に普通選挙法が成立すると、一旦は議員を辞しています。この民意を反映させる考えは国内だけに留まらず、孫文等アジアの独立運動家へも支援を行っています。

中国通であった木堂は、満州事変後、1931 年（昭和 6 年）に内閣総理大臣となると、秘密裏に和平工作を図りますが失敗。翌年 5 月 15 日に首相官邸で海軍青年将校等の凶弾に倒れ、戦前の政党政治（大正デモクラシー）に幕が下りました。

議会政治の創成期から戦前の政党政治の晩期まで活躍した木堂の足跡を常設展や企画展など様々な催しで紹介・顕彰を続け、資料の収集や展示を行う記念館ができてから 20 年以上経ちました。収蔵資料は約 10,000 点となり、このうち約 1,600 点が今年度新たに入手した資料—デスマスクや 16mm フィルム、辞令などで、昨秋、企画展で展示し、残りの資料も順次整理作業を行い、様々な形で一般に公開していく予定です。

当館は、来館者のご要望に応じた施設案内も随時おこなっております。また中庭は、瀬戸内海をイメージした日本庭園になっており、季節の移り変わりが楽しめます。3 月下旬頃から、生家・記念館双方に植えられた木堂が好んだハナノキが、小さな赤い花を咲かせ始めます。是非お立ち寄りください。



犬養木堂記念館

〒701-0161 岡山市北区川入 102-1

TEL 086-292-1820

<http://www.maroon.dti.ne.jp/inukai.bokudo/>

歴研サロン 3 月例会

「中国銀行五十年史よりみた銀行の発展と逸話」

講 師：高橋 義雄氏

高橋氏は岡山大学卒業後、中国銀行へ入行され、『中国銀行五十年史』の編纂を担当されて（財）日本経営史研究所より優秀会社史賞（日本一の社史）を受賞されました。日本金融学会、社会経済史学会に所属されています。『岡山県史』『新修倉敷市史』等の、編・著多数です。現在、岡山大学大学院社会文化科学研究科博士課程後期の大学院生です。

『中国銀行五十年史』の編纂の際、気づいた逸話等を話されます。

日 時：3 月 10 日（金）13:30 ～ 16:00

場 所：ゆうあいセンター 2 階

定 員：40 名

資料代：500 円

申込み：携帯 090-7130-2636（長安）

FAX 086-806-2525（山田）

E メール yanagirousi@gmail.com（丸谷）

会員新刊書発行案内

1 月 8 日の新春講演会に参加されて入会された井上知明氏が昨年 12 月に新刊書を発行されました。

書名『日本史の謎を斜めから見る』

著 者：井上 知明

出版社：鳥影出版社

価 格：1,500 円 + 税

古代史を中心として〈志賀島金印〉から〈本能寺の変〉までを 14 のテーマで、学者や専門家でも見解のわかる日本史の謎に迫るものである。

歴研ウォーキングのご案内

備 前 片 上 方 面

今年の歴史ウォーキングを備前市片上方面で行います。奮ってご参加ください。

日 時：来る 3 月 18 日（土）（雨天中止）

集合場所：JR 赤穂線西片上駅 10 時 15 分（岡山駅 9:25 発、西片上駅 10:06 着）

帰 り：JR 赤穂線片上駅 15:07 発、岡山駅 16:01 着

コース：西片上駅～眞光寺～山門～本陣跡～片上旧道中～和意谷墓所の石を降ろした港跡～藤原審爾の文学碑～宇佐八幡宮～法堺寺（藤原審爾の生家跡）～歴史民俗資料館～備前片上駅（距離：約 3 km、徒歩所要時間：約 4 時間半）

参加費：資料代 200 円（当日集金）

弁当、飲み物：各自持参

申込み方法：電話、葉書、FAX 等

名前、〒住所、電話番号（普通電話ならびに携帯電話）同伴者氏名（ある方のみ）を下記の方法で 3 月 15 日までにご連絡ください。

電話：090-6412-9796

（井上秀男）

FAX：086-451-6036

（藤原康正）

葉書：〒710-0803 倉敷市中島 2007-8

工藤 博 宛て

Eメール：sw225442@cb3.so-net.ne.jp

（工藤 博）

編集後記

もしかすると、邪馬台国は吉備国にあったのではないかと思いかけていた私にとって、安本先生の新春講演はショックでした。九州説にはあれだけの根拠が整っているのかと驚かされました。畿内説、九州説のいきさつがわかったことも勉強になりました。

歴研サロン、杉氏の講演「池田綱政」も興味深かった。平和ボケしている私には後樂園の造営は戦略的配慮がなされた結果だという指摘は歴史を研究する醍醐味を味わった気がしました。そこで私が感想を書きました。「さび」とは時間を味わうこと、感心しました。

岡山には郷土の偉人を顕彰する施設が少ないとの声が挙がったので、今回は犬養木堂記念館を紹介してもらいました。昭和、戦前そして 5.15 事件はもは

や歴史的事件、事実になりつつあるとの感があります。

今年 2 月、岡山県歴史研究会サミットが放送大学岡山学習センターと共催で開かれました。エネルギーを費やして作った「岡山県歴史関連団体便覧」が生かされる活動になればと願っています。（楠）

発 行 岡山歴史研究会

会長代行 大田弘之

編集長 楠 敏明

事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野 504-1

山崎泰二方

自宅電話（兼用）086-276-6654

FAX（専用）086-276-2241

ホームページ <http://b.okareki.net/>